



ご 挨 拶

100th Anniversary
Izumi General Medical Center

創立100周年に寄せて

出水市長 椎 木 伸 一



出水総合医療センターは、1925年3月に「米ノ津町立米ノ津医院」を当地に開設してから、2025年3月で100周年を迎えることとなりました。

この100年の歩みを振り返りますと、創立当初は「米ノ津医院」として内科、外科の2科で発足しましたが、1954年4月の市制施行により「出水市立病院」に改称し、2006年3月には市町合併に伴い「出水総合医療センター」に改称するなど幾多の変遷を経て、現在では、病床数261、診療科25科を擁する中核的医療機関として市民の健康と命の安全を守っています。

出水総合医療センターでは「私たちは良質な医療を提供し、市民に信頼される病院を目指します」の基本理念に基づき、一般医療、救急医療、小児医療及び災害医療を提供し、最近では、新型コロナウイルス感染症の予防や治療に積極的に対応するなど市民の皆様の求める医療を提供してまいりました。

出水総合医療センターが今日まで存続してこられたのは、ひとえに市民の皆様をはじめ、関係各位の御支援のおかげであり、改めて感謝申し上げますとともに、これまで多くの困難を克服してこられた諸先輩方に心から敬意を表します。

一方、現在の医療現場を取り巻く環境は、医師をはじめとした医療スタッフ不足や高齢者人口がピークを迎える2040年問題など、様々な課題が山積しております。

今後、ますます複雑・多様化する医療需要に対応するため、医療機関と行政とが一体となって取り組む必要があります。その中で出水総合医療センターは、市民の皆様をはじめ圏域内の住民の健康と福祉を支える中心的存在であり続けるため、出水保健医療圏内の拠点医療機関として急性期医療や在宅医療の支援などを担ってまいります。

また、地域包括ケアシステムの構築に向けて、行政機関や地域の医療・介護施設等との連携を図りながら、予防医療やリハビリテーションなど地域に根差した幅広い医療サービスを提供してまいります。

皆様の「いのちの安心」を守り、この地域で安心して暮らし続けていただくために、医療機能をさらに充実させるとともに、出水総合医療センターの存在意義や将来像を踏まえ、「出水市病院経営強化プラン」などに基づく経営強化に取り組み、引き続き市民の皆様をはじめ圏域内の皆様の命を守る拠点として、また、出水総合医療センターに寄せる期待に応えるため、より良い医療を追求し未来を切り拓くために全力を尽くします。

結びとなりますが、本誌の発刊に当たり御協力をくださいました皆様に深く感謝申し上げますとともに、ご高覧いただければ幸いに存じます。

創立100周年に寄せて

出水市病院事業管理者 鮫 島 幸 二



出水市立出水総合医療センターが創立100周年を迎えることとなりましたので、病院事業管理者としてご挨拶申し上げます。

大正14年(1925年)3月、米ノ津町立米ノ津医院として開設され、翌年の大正15年に米ノ津町立米ノ津病院へと改称しました。当時は、国民皆保険制度などの社会保障制度が十分整備されていない時代で医療費は自己負担が基本だったようです。

昭和29年(1954年)、出水町と米ノ津町が合併し出水市となったことで、出水市立病院に改称し、その後も診療科の増設と増床を行いながら、出水市の中核病院としての機能の拡充と充実を図り平成7年に総合病院となりました。平成16年(2004年)には出水市制50周年に合わせて出水市立病院も市制50周年記念誌を発行しております。

平成18年(2006年)には出水市、野田町及び高尾野町が合併して新しい出水市となったことを機に、出水総合医療センターへと改称し、野田、高尾野の町立病院を診療所として出水市病院事業に集約し地域医療に貢献してまいりました。出水総合医療センターは現在261(うち46床を休床)の病床と25の外來診療科、常勤医師28名、非常勤医師32名、総職員数500名余りとなっています。

この100年に及ぶ当医療センターの道のりには幾多の功績と困難があったことと思います。私が就任してからまだ日が浅く、過去の業績など見聞によるところが多いのですが、振り返りますと、平成2年(1990年)5月には全国自治体病院協議会及び全国自治体病院開設者協議会から優良自治体病院としての表彰を受けております。その後、平成6年(1994年)には330床(うち55床は休床)まで増床し看護体制の充実や最新の医療機器の導入などが行われました。しかし日本社会はというと1990年代になりバブル経済が崩壊、同時に日本の医療政策・行政の制度改革により診療報酬が抑制され、一方、医療技術の進歩による医療機器導入は必要でありました。このような中、地方の病院は使命感をもった大学医局の医師派遣によって成り立っていたといっても過言ではありませんでした。その後、平成16年(2004年)に始まった初期臨床研修医制度を機に大学医局の地方への医師派遣が困難となり、当医療センターも30数名いた常勤医師は平成23年(2011年)には16名まで減少、同時に経営状況は著しく悪化しました。その後、鹿児島大学をはじめ熊本大学や福岡大学医局の協力で医師数は徐々に増加に転じ、職員一丸となつての再生プロジェクトの実施により立ち直りつつありました。令和2年(2020年)からは新型コロナウイルス感染症が全国民に不安をもたらしましたが、当医療センターは市民のためにと躊躇なく率先して検査、診療、ワクチン接種に当たり市民のための病院であり続けるという信念を貫いています。当医療センターの現状はまだ予断を許さない状況ではありますが、今後も市民のために最善を尽くせる病院であり続けたいと願っています。

創立100周年に寄せて

出水総合医療センター院長 花 田 法 久



出水総合医療センターは今年創立100年を迎えました。諸先輩方が築いてこられた歴史の重みをひしひしと感じております。

当院は後で詳しくご紹介がありますが、大正14年（1925年）米ノ津医院として開院しました。この100周年の区切りの年に、院長として立ち会える縁を光栄に思います。これまでの100年を顧みるとき、出水市行政をはじめその時々の方々のご尽力、出水郡医師会の先生方、近隣の医療介護施設の方々、そして鹿児島大学、熊本大学、福岡大学の医師派遣、何より出水市民の一人お一人など、多くの皆様に支えられ今日を迎えることができましたこと、感謝の念に堪えません。本当にありがとうございました。

日本を取り巻く環境に目を向けますと、人口減少、特に生産年齢人口の減少に伴う労働力不足、膨らむ医療費・介護費等、解決が難しい問題は山積しています。出生数は70万人を下回り、今後20年、医療ニーズは横ばい、介護ニーズは増加し、労働力不足は目を覆うばかりです。効率化だけでは乗り切れません。多様性を受け入れ、世界中の人たちとWin-Winの関係を築いていく必要があります。

次の100年に向けた病院の方向性について私見を述べさせていただきます。それは「必要とされる医を届ける」というシンプルなことです。「医」とは医療を中心とした生活全般を意味します。「必要とされる医」は変化し続けます。これまでは、救急をはじめとした急性期医療から、回復期を含んだ医療の提供が現時点での当院の立ち位置です。記憶に新しい新興感染症に対する医療や災害医療も当院の果たすべき役割です。今後はこれまで以上に地域包括ケアを意識した病院づくりが求められています。小児医療、周産期医療も公立病院に課せられた使命です。さらに、在宅医療から出水地区のまちづくりに至るまで、今後100年で当院に期待される役割は、大きく変化していくでしょう。しかし、公立病院として、やりたい医療ではなく、「必要とされる医」を届けることが、当院に課せられた使命と考えています。私たちの仲間や後輩が実現してくれることを期待し、任せたいと思います。

最後になりましたが、出水総合医療センターは職員一同、次の100年を目指して、新たな気持ちで地域医療に貢献できるよう頑張りますので、今後とも一層のご支援・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

